

紹介

珍らしい大興行事寸見

「おさがれ石」の儀と、  
「君が代」と、大友家の「祝儀」

会員 古藤 田 太

私共の「佐伯史談」の今日の盛況は、全く羽柴先生の骨筆の力によるものであることは、周知のとこみである。長い歲月にわたって、先生のたゆまない努力の結晶である「膳写史談」、また、芸術助といつか工藝助といつか美しく細緻な「史談」が、本号をもつて終末を告げるといふことは、私共にとって重大な出来事であると共には、急角度の変転でさえある。

最後の「膳写史談」に感謝をこめて、お別れの挨拶をするつもりで、来るる歳にふさわしい記事を探していたが、適当なものが見へからぬままに、取急が本稿と認められた。題して「珍らしい大興行事寸見」といたしたい。

司馬遼太郎先生著「歴史の中へ日本」の中に、徳川將軍家の大奥では、元旦に、「おさがれ石」という儀式があることが掲載されている。またお読みになつていない方のために、本文を借用してご紹介申しあげたい。

御台所は、午前四時に起床する。化粧をおえたあと、廊下に出る。廊下にはすでにもうせんが敷かかれており、なかほどにタライがすえられてゐる。その中に石が三つならべられてゐる。

やがて御台所がタライの前に着座すると、むこの側

にすわつた中將が一礼し、

「君が代は、千代に八千代に、おさがれ石の」となえる。御台所はそれきりうけて、

「いは辰となりて、苔むすまで」と下の句となえる。

そのあと中將が、御台所の手に水をそそぐ。そういふ儀式のあったあと、將軍家に年頃を申しつる。

この元旦儀式は將軍家だけでなく、同持大名級の想にもあつたという。そのもとに徳川家の創始ではなく、徳川幕府の世社からひきついでにゐるのではないかと思ふ。

明治二年（一八六九）英國から貴賓が来た。それきりてます湯所は浜御殿（兵衛宮）といふことにきまり、款人の英語のできる者が接待役になつた。

とこみて、貴賓がきた日あり、豪華が必要であつた。このいう瓜あいの豪華のことは、軍樂隊のやとい教師 J. W. フェントン（英國人）が面倒をみていたが、これは接待役の詰所へゆき、日本の国歌はなんだと聞いた。かれはあわてて、上司にきくべく軍務官役所へかけつけ、おりから會議中であつた藩の川村純義とよびだし、そのわけを詰すと、川村は急に怒りだし、

「敬ぐらいふことではないちいちオイに相談すべし、あるか。万事をまかすといふことでオハンをちを接待役にしたのではないか」

ととなりつけて會議の席へもどつてしまつた。川村はのちに海軍になつた人物である。

接待役の原田宗助は青くなつたであらう。ともかくお洪御殿へかけもどつて同様に相談した。この同役が正骨太郎乙である。正骨は田幕臣で、徳川家が静岡に

うつとれてからもそれに倣い、徳川家之藩津兵学校で英語をおしえていた。その英語の技能を買われて、俸給と命ぜられていた。

乙骨は旧幕臣だけの大奥のしきなりを多少知っており、「ふと」おさざれ石の儀式をおもいだし、「こういふのはどうか」と言い、歌詞を口ずさんでみた。薩摩の原田氏大八がおどろき、

「その歌詞なら、わしの国の琵琶歌の中にもある」と手をついて賛成した。なにぶん火急のときであるだけにフエントンをまじり、原田みずからがそれを琵琶歌のふしでうたわけてみせた。フエントンはこの奇態をふしまわしにわざといたらしめ、とばかり多少の手をおしきして楽譜はとず、当日の間にあわせて。

表が代うんぬんというのほ、類似の歌が「古今集」にもある。また「今様」にもあれば、筑紫流の第曲の薩摩琵琶歌にもあるところをみれば、この歌は、

「めでためでたの若松さまよ」と同様、古くはその家々のことほぎのためになうたわれていて流布していったものであろう。

国歌「我が代」が誕生するにいてのはなほしは精説あり、たとえびフエントンからいわれ左軍楽伝習生額川吉次郎が砲兵隊長大山巖に告げ、大山は同藩の野津鏡華も大迫貞清にばかり、薩摩琵琶のなからこの歌詞をえぬび、フエントンに示したともいい、これが通説になっている。おそろく火急のかりだから、いくつもの系路で人が動いたのであろう。しかしエトクモトは古の語がどうやら不当たしい。」

次は大友家についてであるが、大友家の年中行事について「当家中作法日記」があつて、これに筆執して

取り違わられてきたようである。今日伝わるものは文禄四年十月、水戸幽閑中の大友吉統が調査作製したものと云ふことである。

これによると、大友家の行事万般について詳細に述べられてゐる。將軍家の例に見らるるようには、右だたる名家に於いては、それだけ特有の行事があつたようである。今日は、大友家の殿中行事模範の行事の模範について紹介したい。

模範は、別年竹田の志賀家から編進されるのが例と成り承知していらる。

那・築城郡・仲津郡・京都郡、何飲、御賜足油断已下之事、任前々旨堅、肝要候以彼調御模範之儀全圖走之糸催促候事向三人申合不可有油断之儀侍 恐々謹言

(永祿元年)十月廿一日 吉岡長増

夜上土佐守殿

味上野入道殿

吉村下忍入道殿

乙咩佐渡御殿

といふ文書があるところから、志賀氏以外からも編進されたものがある。

模範については、私も全く不明なことが多い。殿中の模範から読者自身で判断して欲しい。

朔日模範、直入御より調に付て越年也。其故としの夜、小袖一重遠候。志賀も、小袖一重直上申候。朔日の夜に入り候て、模範参候。

座敷次第のこと。左右に宿老参。其次かつら在國候へは居候。其次間次衆。宴相寺ハ間次衆くみませめて着座也。医者衆等とも被奉候。是ハ、雲松などの

採る位のかたハ間次衆より高座也。其外及、時宜  
下より間次と組まセ堪忍也。祿樂皆者不召出候。近  
羊者、宝生權太夫・春藤道保・松清太夫・止蕨五兵  
衛召出也。

板飯馳走之衆ハ何夜主居の古座に堪忍候。もと  
とは折紙を猿樂衆へ、板飯馳走のかたより遣候。但  
近年厚紙のもの、うす板の間、一折のついで候ツ  
是日、官仕衆持出遣あり。

さて祝参献の次第、初献さうに二ニ壇にのしる  
二献目玉を及亭主嘉例ニ相初。其時、太刀目録進上  
也。其次こめし、二のことくに、かからけり盛て  
参。其次入麴。其次雁の汁。何も手組アリ。

此時太夫誼初仕候。此とき猿樂衆へは折紙遣也。  
献とさし候て各へさしり有板飯奉行。酒奉行迄召出  
也。板飯奉行先代ハ下拜上総介ハ同備後守。足司越  
前守。志村越後守。葛城山城守也。酒奉行ハ秋岡兵  
部少輔。得丸尾張守。兼師守伊豆守也。

試の夜、彼著到と記録所へさせ候。近年仁徳も  
かへり申候。板飯もり物、さほの物、遠方大か不定  
申候。昔者近世之衆へ板飯調りか反より葦水鳥。鬼  
具外厚紙を遣候て預被申候。近年何とやらん候て  
所給預候ツ。昔者及目し不着衆ハ朔日対面衆之。

すことは粗畧を板飯紹介に終わった。むしろ「対面行  
事とした方がよかつたかも知れない。何れともあれ業々  
しい行事であつたらしい。

格式張った振舞がわかるようである。

(おわり)

紹介 宇目町内ノ指定文化財

四指定文化財

特別天然記念物 カモシカ 翠嶺一帯

県指定文化財

切支丹墓 史跡 重因(渡辺家)

藤河内溪谷 名勝 藤河内

宇目の野生桐 天然記念物 藤河内

切支丹板鏡 史跡 中岳(佐保家)

千束 史跡 千束

大師庵空塔 建造物 権見園

上爪板碑 史跡 上爪(大字権見園)

崇徳寺空印塔 史跡 酒利(大字千束)

橋本五輪塔群 史跡 橋本(大字小野)

上津小野石幢 史跡 上津小野

河内石幢 史跡 河内(大字河内)

宮野観音 史跡 宮野(大字宮野)

宇目理室堂印塔 史跡 宮野(大字宮野)

市園道祖神 史跡 市園(大字市園)

田野磨崖仏 史跡 田野(大字重因)

木崎山千人間歩 史跡 木崎山(大字木崎)

水崎女郎墓 史跡 水崎(大字水崎)

朝日織地跡 史跡 朝日(大字朝日)

巻つけ祭り 史跡 巻つけ(大字巻つけ)

河内笠地蔵 史跡 河内(大字河内)

田原獅子 史跡 田原

田原神樂 史跡 田原

(以上)